

京都左京

あゆみと  
くらし

宇野 日出生 著



京都左京

あゆみと

くらし

宇野日出生著

## 発行にあたって

京都市左京区は、二四七平方キロ以上に及ぶ区域の中に、北部の山間地域から南部の市街地まで多くの個性豊かな地域で構成されています。

左京区は、昭和四年に上京区から分区して誕生しました。行政区としての歴史は八十七年ですが、それぞれの地域は、往古から時代の変遷の中で、伝統、豊かな文化、美しい自然等を大切に守りながら、長く歴史を積み重ねてきました。各地域に受け継がれている数々の伝統行事は各地域の歴史の奥深さを物語っています。

そのような魅力にあふれた左京区の各地域の歴史と文化を紹介する冊子として、この度「京都 左京 あゆみとくらし」を発行する運びとなりました。

この冊子は、平成二十四年度から市民しんぶん左京区版「左京ボイス」で京都市歴史資料館の宇野日出生先生に連載いただいた「左京の歴史と文化」を一つにまとめたものです。左京区民の皆様はもとより、区内外の多くの方々にご覧いただき、左京区各地域の歴史の奥深さをご堪能いただければ幸いです。

今後とも、左京区基本計画「左京はあとがかるプラン」に基づき、左京のまちの更なる発展を目指して、区民の皆様とともに取り組んでまいりますので、引き続き、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、資料収集、取材、執筆等にご尽力いただいた宇野先生、貴重な写真や資料を提供いただいた皆様に、心から感謝申し上げます。

京都市左京区長 浅野 信之

## 目次

聖護院の里〈栄枯盛衰物語〉	6	岩倉〈実相院と大雲寺〉	30
吉田〈信仰と学業〉	8	木野〈土器の里〉	32
岡崎〈都市の再生〉	10	八瀬〈八瀬童子の里〉	34
南禅寺門前〈門前町の風景〉	12	大原〈広域集落の営み〉	36
鹿ヶ谷〈風光明媚な丘陵〉	14	静原〈里人の生活〉	38
浄土寺〈祈りの丘〉	16	鞍馬〈信仰と伝統〉	40
北白川〈里人の絆〉	18	貴船〈社と里人〉	42
田中〈里から都市へ〉	20	二ノ瀬〈顕彰の軌跡〉	44
下鴨〈神域の集落〉	22	花脊〈山里の生活文化〉	46
修学院〈名所旧跡の地〉	24	広河原〈山里の自治と信仰〉	48
上高野〈京郊集落の営み〉	26	久多〈中世の自治と信仰〉	50
松ヶ崎〈自治と法華の里〉	28		

### 【凡例】

各集落の立項については、京都市編『史料 京都の歴史』左京区（平凡社、昭和六十年）の編集方針に基づいていますが、筆者の執筆上の関係で変更しています。

なお、『史料 京都の歴史』では、京都の町づくりの歴史を勘案して、旧市街部では学区、周辺部では旧村で区分されています。（五頁に掲載の左京区集落区分図を参照）

また、本書では、新洞学区は岡崎村に集約しています。

## はじめに

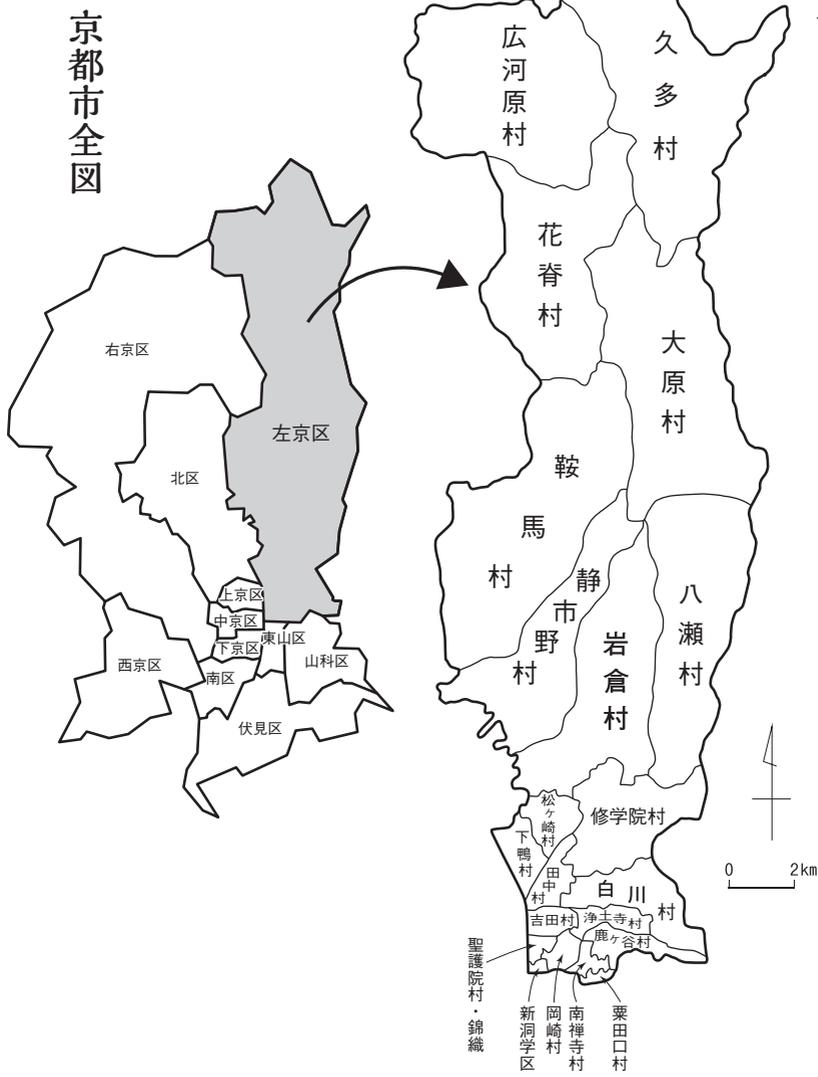
京都市左京区。この行政区は平安京の左京とは、大きく異なっています。いうまでもありませんが、平安京の左京域は京都市の中心部である上京区・中京区・下京区に含まれます。平安京街区外、すなわち洛外の現左京区は、十一世紀後半から始まる鴨東白川における院政の地として、脚光をあびた地域でもありました。また周辺の近郊農村及び北部の山間農村、これに対して京都近代化の象徴ともいえる岡崎地区周辺。まさしく左京区は古代から近現代、都市から農村までの「あゆみとくらし」が凝縮された地域でした。言うなれば平安建都一二〇〇年のあゆみのなかで、その歴史的懸隔を著しくあらわした地域といえるでしょう。

本書はこのような左京区域の歴史と文化について著したものです。市民しんぶん左京区版「左京ボイス」に連載したものを出版に際して、「田中（里から都市へ）」を追録し、再編集いたしました。集落ごとに、文意の補足及び参照のため、写真を各二点ずつ掲載しました。本写真については、歴史資料として初公開のものも含まれています。

左京区民の方はもちろんのこと、京都の歴史にご興味のある多くの皆様に、お読みいただきたく存じます。わが国のあゆみに先導的役割を果たしてきた都市京都。その一端をかいまみていただければと思います。

宇野 日出生

左京区  
集落区分図



京都市全図

『史料 京都の歴史』左京区から  
 注1：旧市街部は学区、周辺部は旧村で区分している。  
 注2：新洞学区は元々、岡崎村に含まれていた。

# 聖護院の里 〈栄枯盛衰物語〉



聖護院の森に鎮座する熊野権現と周辺の賑わい（『華洛細見図絵』文久4年（1864）刊）

聖護院とは寛治四年（一〇九〇）、白河上皇の熊野詣に際して、先達を果した増養が熊野三山檢校職に任じられ、その法務を営むために開いたのが始まりといわれています。この聖護院の寺名が、後に村名としても定着するようになったのです。

平安時代後期、院政を始めた白河上皇は院御所としての白河南殿・北殿を建立し、また御願寺たる蓮華藏院なども創建して、当地は院政の中心地としての華やかさをみせました。ところが保元の乱で主戦場となったことから、辺り一帯は大きな被害を蒙りました。応仁の乱では、聖護院は兵火を受けて焼失。その後は岩倉・御所八幡町（上京）を経て、延宝四年（一六七八）に現在地へ再建されました。なお江戸時代、聖護院は焼亡した禁裏御所の仮御殿ともなっており、朝廷との結びつきのほどを知ることができません。

集落は室町時代から形成され、聖護院村と呼ばれるようになりました。江戸時代中頃からは、多くの文化



現在の聖護院門跡

人も居を構えました。幕末から明治以降にかけては、陶芸などで知られた太田垣蓮月や画家の富岡鉄斎らが、熊野権現（熊野神社）前に住んでいました。熊野権現は聖護院の鎮守社で、聖護院の森に鎮座していました。この森は村の南に位置し、江戸時代は梅や桜の名所として、夏は納涼の場として賑わいました。聖護院村は近郊農村としての役割も担っており、さまざまな野菜が栽培されました。明治以降は聖護院大根・聖護院蕪菁・聖護院胡瓜きゅうりといった聖護院の冠が付けられて、広く市中の食膳を飾りました。

幕末は藩邸や京都守護職の洋式練兵場がつくられて、集落の景観は変貌します。明治になると京都帝国大学附属病院が設立。そして集落内の道路の拡幅、市電の開通へと発展し、都市化が急速に進みました。現在はすっかり市街地となりましたが、それでも昔のなごりはここかしこに、しっかりと残されています。

# 吉田〈信仰と学業〉



吉田社境内の大元宮（『都名所図会』安永9年〈1780〉刊行）

吉田山の西側一帯に発達した集落が吉田村です。吉田山は標高一〇〇メートル余の丘で、古くは神樂岡とも呼ばれており、西麓には吉田神社（吉田社）が鎮座していました。「神様の坐す神座の岡」が神樂岡になったと思われ、以来深い信仰に支えられてきた地域でした。したがって九世紀中頃に建立されたといわれる吉田社の存在が明らかになると、ますます神座の岡たる神樂岡が注目されるようになってきたのです。

平安時代から鎌倉時代においては、公家・武家の邸宅や寺院も点在するといった鴨東の一地域を形成するようになってきました。室町時代以降は戦略上の一画をしめた領域としても注目されましたが、やはり一番象徴的な部分は吉田社との関わりでした。吉田社は中世以降、公武から厚い信仰を受けました。また代々社務を務めた下部氏は、十五世紀後半には神道界の統一をめざし、吉田神道を唱導しました。その核となる建物が大元宮と呼ばれるもので、参詣者はここにお参りすれば全国の神々に詣でたことと同じであると



幕末期の吉田村（「京町御絵図細見大成」慶応4年〈1868〉）

して、たいそうな賑わいをみせました。江戸時代になると全国の神職の大半を傘下におくまでになりました。したがって吉田の名は、我が国の隅々に至るまで知られるようになったのです。当然、吉田村の大半は吉田社の社領で、村はおおむね田畑で占められていました。集落は吉田山麓西部に集中していました。尾張徳川家の大名屋敷や九条家下屋敷なども設けられていました。ところが明治時代を迎えると、村の景観は一変しました。明治二十二年（一八八九）、第三高等中学校が大阪から移転新築され、翌年には織物産業の近代化をめざした京都織物株式会社の設立。そして同三十年（一八九七）には、京都帝国大学が建設されました。続いて京都府尋常中学校・京都高等工芸学校・私立吉田学院・京都市美術工芸学校・私立精華高等女学校といった具合に、たてつづけに学校が建てられていきました。明治時代、吉田は静かな田園地域から高等教育地域へと大きく変貌したのです。さらに道路の拡張整備などによる地域の開発は、京都の近代化路線を象徴するものでもありました。現在の吉田一帯は都会そのものですが、ふと見上げると吉田山は昔と変わらぬ景観を今もしっかりと残っています。